エゼキエル書
　前半のビデオでエゼキエルが祭
司であり バビロンの捕囚になったことを
学びました また
彼がバビロンで神の神殿の偉大な 栄光に出会ったことも見ました
それはイスラエルの偶像礼拝と 不正のため
神がご自身の神殿を去らなければ ならなかったためでした
そしてそれでもまだ将来の希望 が残っていることを語りつつ
エゼキエル書はまずはイスラエル に
次に周辺諸国に対する神の裁き があることを伝えています
そして 33 章で決定的な瞬間が訪 れます
バビロンの攻撃によってエルサレムが陥落したという知らせを
エゼキエルが受け取るのです

神殿も破壊され
エゼキエルの恐ろしい警告が現実 のものとなりました
捕囚にされるという災難は イスラエルがかつて経験したこと
がないほど恐ろしい出来事でした そのため
イスラエルは神に永遠に見放された のかと恐れを抱きました
しかし 11 章の終わりで捕囚にされて も
イスラエルにはまだ未来がある と神は約束されたのでした

そういうわけで 本書の後半ではエゼキエルの希望の
幻を見ていきます
それはまずイスラエル次に近隣
諸国 そして全世界に関するものでした

イスラエルの希望は 新しいダビデのような未来のメシア
なる王が立てられるという 神の約束から始まります
彼はイスラエルが必要としながら 現れなかったリーダーです
そしてこのメシアなる王が統治 する新しいイスラエルの民は
作り変えられた人々です 神は彼らの反逆という問題に
彼らに新しい心を与えることで 対処すると言いました

これはモーセが申命記の終わりの ほうで
神は彼らの頑なな心を取り除き 神の霊を送って

彼らが新しい柔らかな心で神を 愛し従うことができるようにする
と言ったのと同じです これは次の幻に繋がっています
エゼキエルは大きな谷が 人間の骨でいっぱいになっている
光景を見ます 神はそれがイスラエルの今の霊
的な状況を表していると言いました 神に対するイスラエルの反逆は
捕囚と文字通りの死をもたらしました が
それだけでなく神との契約における 死をももたらしていたのです

しかし神は神の霊によって 民がふたたび生きるようになる
と言いました するとエゼキエルは風が吹いて
すべての骨が立ち上がり 神の息と命で満たされ骨が皮膚
をまとい それらが新しい人となって彼の
前に立つのを見ました この幻は創世記 2 章で神が人をちり
から作り 息を吹き込んだ場面を思い起こ
させます イスラエルとすべての人類が神
に反逆した結果死を招き 今や唯一の望みは神が新しい創造
をなし人々を神と また互いとの愛の関係に生きら
れるように 作り変えてくださるということ
だけです
とはいえ
神がご自身の民の心に巣食う悪の 問題を解決してくださるとして
もまだ疑問が残ります例えば
国々にはびこる悪はどうするのか 神が臨在してくださる神殿はどうなる
のか

これについては エゼキエル書の最後の 2 つのセクション
が答えています
まず 38 章と 39 章でマゴグの地のゴグという人物にたとえられた国々
の悪が最終的に神に打ち負かされる と約束されています
この名前は創世記 10 章にある古代 の王国と土地に由来するもので
はるか昔の強い国々でした エゼキエルは聖書に出てくるこの
古代の名前を すべての凶悪な王国の象徴として
使ったのです ゴグは四方にある 7 つの国々と同盟
を結んでいました これはつまりあらゆる国々と手を
結んでいたということです そしてエゼキエルがなぜ
この書の前半でツロの王とエジプトの王について述べたのと

同じ表現でゴグのことを記した かというヒントにもなります
エゼキエルにとってゴグとはあら ゆる悪を寄せ集めたもので
聖書に出てくる最も暴力的な人々 のことであり
神に対する人間の反逆の典型だった からです
このゴグのストーリーでは民を 回復させようとする神のご計画
をゴグが妨害しようとします そしてちょうど出エジプト記の
エジプトの王のように
ゴグは神の民を滅ぼそうとします が
ゴグの上に神の正義が下されます

その一連の場面を読むと一見つ
じつまが合わないように思えます というのもゴグと彼の軍隊はま
ず地震によって滅ぼされ 次に二度にわたって炎によって
滅ぼされ そののち神に打たれて
その死体は何か月も野ざらしに されると書いてあるからです

これらの記述は明らかに象徴的な 表現です
神の世界を台無しにした人間の 悪を神が徹底的にうち滅し
それゆえに新しい創造の道が開 かれるということを表すために
エゼキエルはあらゆる文学的な 表現を駆使したのです

こうして悪への裁きが終わると 最後のセクションでは
神の臨在が神の民と神殿のもとに 戻り
全世界の回復がなされると語られて います
エゼキエルはまず新しい都の新しい 神殿についての長い
複雑な幻を見ました 彼が幻の中で見せられたこの新しい
神殿は ソロモンが建てた神殿よりずっと
大きく荘厳でした

そこには新しい祭壇があり新しい
祭司がいて 新しいかたちの礼拝をささげてい
ました この幻を見たあと
彼が最初の幻で見た神の栄光の王 座が戻ってきて
新しい神殿の中に入っていきました これらの神殿の幻が何を意味する
のかについては 長年の議論の的でした
この幻がいつの日か実現しここに 書かれているのは

メシアが再臨し神の王国を築く ときの神殿の実際の設計図である
と信じているクリスチャンやユダヤ教 徒がいます

しかしこの幻はエゼキエルが見た ほかの幻と同様
象徴的なものであり メシアの王国において神の臨在
が民の間に戻ってくる という事実を表しているのであり
実際の建築物を指しているとは 限らない
と考えるユダヤ教徒とクリスチャン も多くいます

どちらにしろ重要なのは エゼキエルがその街をエルサレム
とは呼ばなかったことです その理由は 47 章と 48 章に記されています
エゼキエルは神殿の敷居と階段 から
小川のような水が流れているの を見ます
小川はすぐに荒れ狂う川となり 神殿から町へ
そして荒野へ さらにはこの世で最も荒れ果て
た場所である死海の谷へと 流れていきましたそして川が通
ったあとには木々が生え 死の海は植物や動物で溢れた命
の海に生まれ変わりました これは創世記 1 章と 2 章のエデン
の園のイメージと重なり エゼキエルの見た幻がどれほど
壮大なものかを教えてくれます

神のご計画はいつもすべての人間
そして全世界を ご自身のいのちあふれる臨在の
もとに帰らせることだからです こうしてエゼキエル書はこの町
の名が主はそこにおられる であることを告げて閉じられます

エゼキエルの幻は 新しい人間たちが新しい世界に
住むようになり 命を与える神の霊によって活力
のあふれる 将来の希望に満ちて終わります
この新しい世界には神の愛と義 が満ちているのです
これがエゼキエル書です

500字要約　エゼキエル　後半

『エゼキエル書』の後半では、エゼキエルが神の約束と希望を示す幻を体験します。彼は新たなダビデのような王、メシアの到来と、神によって人々の心が新たに作り変えられることを予言します。また、人々の反逆による死を象徴する骨が生まれ変わり、神の霊によって再び命を得る幻も見ます。さらに、後半では悪に対する神の裁きと全世界の回復を予言し、新しい神殿の幻を通じて、神の臨在と新たな創造を表現しています。この幻は象徴的な表現であり、神の臨在と愛に満ちた新しい世界の到来を示しています。